

2025. 11. 9 (日) 使徒 27 : 39 ~ 44

27:39 夜が明けたとき、どこの陸地かよく分からなかったが、砂浜のある入江が目に残ったので、できればそこに船を乗り入れようということになった。

27:40 錨を切って海に捨て、同時に舵の綱を解き、吹く風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んでいった。

27:41 ところが、二つの潮流に挟まれた浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。船首はめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波によって壊れ始めた。

27:42 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと図った。

27:43 しかし、百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らの計画を制止して、泳げる者たちがまず海に飛び込んで陸に上がり、

27:44 残りの者たちは、板切れや、船にある何かにつかまって行くように命じた。こうして、全員が無事に陸に上がった。

28:1 こうして助かってから、私たちはこの島がマルタと呼ばれていることを知った。

<説教>

使徒パウロは他の数人の囚人と一緒にローマ皇帝の親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡されて、カイサリアから船に乗って出発しました(27:1-2)。このローマへの道のりは大雑把に見ても 3,000 km 以上あり、そのほとんど、最後の〈プテオリ〉(28:13)からローマへの約 200 km 以外は船旅でした。そのおおよそ中程に至ろうかというクレタ島の沖でユーラクロンという暴風に巻き込まれて漂流することになってしまいました(14-15)。船は暴風に激しく翻弄され(18)、暴風が激しく吹き荒れたので人々は死を覚悟するほかない絶望的な状況となりました(20)。

そんな中でパウロが一人、人々を励まし、元気づけていました。「恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。」(24)と神が御使いを通して語ってくださったからです。「私に語られたことは、そのとおりになる」とパウロは神を信じていました(25)。パウロはこの神を「主」とし、この神に仕えていました(23)。

14 日目の夜が開けかけたころ、パウロは皆に食事をするように勧めました(33)。「あなたがたは助かります。頭から髪の毛一本失われることはありません」と言ってパンを取り、皆の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べました(35)。合わせて 267 人いた皆が元気づけられて食事をし、十分に食べました(36-38)。それで元気と希望を取り戻したのでしょう。その後、船を軽くするために、まだ残っていた麦を海に投げ捨てました(38)。どこかの陸地に近づいている(27)ことが分かっていたので、座礁しないように無事に上陸しようということだったのでした。

〈夜が明けたとき、どこの陸地かよく分からなかったが、砂浜のある入江が目に残ったので、できればそこに船を乗り入れようということにな〉りました(39)。

〈錨を切って海に捨て、同時に舵の綱を解き、吹く風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行〉きました(40)。

〈ところが、二つの潮流に挟まれた浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。船首

はめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波によって壊れ始め）てしまいます(41)。なんてえこった！。見えない岩でもあったのでしょうか。それまでは、これで大丈夫、助かったと思っていたことでしょうか、がっかりです。せっかくここまで来たのに、最後の最後に、水夫たちは何をやってんだ？といったところだったでしょう。そして、やはり自分たちは助からないのか、パウロが言ったことはそのとおりにはないんじゃないか、という思いが人々の中に浮かんでも不思議ではない状況だったと思います。さっきまでの希望はどこへやら、人々は再び怖れ、混乱に陥ったのではないのでしょうか。

そんな中で兵士たちは恐ろしいことを考えました。〈兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと図）りました(42)。もちろんこの囚人たちの中にはパウロも含まれています。囚人が逃亡するとその監視役の責任が厳しく問われたからでしょう。先の水夫たちといい、この兵士たちといい、自分たちの身を守ることが一番の人間の本性が現れたということでしょう。そして、これまでパウロのおかげで自分たちのいのちが助かって来たこともすぐに忘れる恩知らずとも言えるでしょう。また、監視し、無事にローマに送り届けるべき囚人を勝手に殺してしまい、後でその罪、責任を問われるということは無かった、あるいは考えなかった浅はかな仕業でもあったと思います。

しかし、さすがに百人隊長はこれまで暴風による難船の危機の中でパウロが如何に大きな働きをしたか正しく、良く見ていました。そして囚人たちを無事にローマに送り届ける責任を正しく弁えていました。〈しかし、百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らの計画を制止し）ました(43)。そして、前に兵士たちが〈小舟の綱を切って、それが流れるままにし）てしまった(32)ので上陸用の小舟がありません。それで、〈泳げる者たちがまず海に飛び込んで陸に上がり、残りの者たちは、板切れや、船にある何かにつかまって行くように命じ）ました(43-44a)。もちろん、神が百人隊長の心を動かしてくださったのです。

〈こうして、全員が無事に陸に上がった）のです(44b)。こうして、「あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです」とパウロが言ったとおりにになりました。パウロがそう言った根拠は（既に見たように）神の御使いのことばだったのですから、結局〈全員が無事）だったのは神のみことばのとおりだったということになります。パウロでさえその前には「皆さん。私の見るところでは、この航海は積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言っていました(10)。しかし神は御使いをとおしてそのパウロのことばも「あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです」と修正させました。何日も続いた暴風、大波といった自然現象、そして水夫たちや兵士たちの自分勝手、ほとんどの人々の絶望、そんな人間の愚かさ、それらはすべて神の御支配の下にあり、神がそれらを用い、又は乗り越えてご自身のご計画を進めて行かれたのです。本日の箇所でも、さあもうすぐ無事に着くことができそうだと人々が思ったときに、船が座礁して壊れ始めてしまいました。そしてパウロたちのいのちが危険に曝されました。しかし神は百人隊長の命令をとおして全員のいのちを守られました。

状況は違いますが、かつてガリラヤ湖の嵐をイエスがお静めになったことが思い起こされます（マタイ 8:23-37、マルコ 4:35-41、ルカ 8:22-25）。あのときもイエスは人としては眠っておられましたが、自然を造り支配しておられる神として弟子たちとともにおられました。このパウロの旅の船の中でも（それに限らず全ての旅程でですが。否、パウロの

歩みのすべてにおいてですが）神は、主イエス・キリストは聖霊によってパウロとともにいてくださいました。それまで何度か船を乗り換えましたがどの船にでも主はともにいてくださいました。パウロはこのお方を「私の主、私が仕えている神」と公に告白し、皆の前で感謝の祈りをささげました。もちろんパウロはそういうときだけでなく、いつもこの主なる神、三位一体の神に全く信頼し、祈りと賛美をささげていました。礼拝していました。このたびの暴風嵐の中でも悪戦苦闘している自分たちを主なる神は見ておられ、ともにおられて、この嵐を、そして自分たちをどうしようとするかをみこころのうちに決めておられるのだと信じて委ねていました。そのうえで確かに人々を励まし、自分の為すべきことを為したのです。

始め人々はクレタ島で冬を過ごそうと考えました(12)。しか主はパウロたちをもっとローマに近いマルタ島(28:1)にまで連れて来られました。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となる」(ローマ 8:28)。今回の船旅の長い記事をとおしてもそのようにも教えられます。そういう神への信頼（信仰）を持って私たちも歩んで行きたいと願い祈ります。